



総合患者支援センターニュース

Integrated Support Center for Patients and Self-learning
Okayama University Hospital

〒700-8558
岡山市鹿田町2丁目5番1号
岡山大学医学部・歯学部附属病院
総合患者支援センター
☎ 086-223-7151 (代表)
☎ 086-235-7744 (直通)

～岡山大学病院の目指す方向性～

病院長 森田 潔

医療界は今まさに正念場を迎えております。本年4月に厚生労働省より大幅な診療報酬改定がなされ、各病院は戦々恐々として新しい年度を迎え半年が経過いたしました。このような流れの中で大学病院の存在意義を見直し、その特徴を生かした診療を行うことが重要な課題であり、私たち岡山大学病院の目指すところです。

大学病院の役割は3つあると考えます。大学病院には地域の中核病院として新しい医療の開発に務め、高度先進的医療を提供する特定機能病院としての役割、また、総合的な医療機能を活かして良質な医療を提供し最後の砦としての役割、そして人間性豊かで創造的な専門性の高い医療人を育成し、臨床における医・歯学の研究を推進する教育研究施設としての役割です。同時にこの3つの役割を果たすことが岡山大学病院に与えられた課題であると思います。岡山大学病院にはこの重大な役割を担い、患者さまに満足していただける良い医療を提供することが求められています。良い医療を提供するためにはスタッフ及びシステムの強化が不可欠であると考え、看護師の増員、コ・メディカルの重点配置、また電子カルテの補充、物流システムの改善など実践していく予定です。そして良い医療を提供するためには優れた医療人を育てることが必要であり、優れた医療人を育てるには快適な医療環境をつくらなければなりません。患者さまそして職員が院内で快適に過ごすことができるように病院のアメニティの改善に取り組み、美しく機能的な病院にしたいと思います。現在建築中の南Ⅱ病棟は平成19年11月完成、平成20年4月開院の予定です。岡山大学病院の新しい1ページが始まるまで1年数ヶ月、この間に従来の建物もより機能的になるようにしていきたいと思っております。



～地域連携における WIN-WIN 関係の構築～

センター開設 3 周年記念講演会報告



愛媛大学病院医療福祉支援センター
櫃本真幸センター長

6月24日、梅雨の晴れ間の土曜日に、総合患者支援センター開設3周年記念講演会を開催しました。医療を取り巻く環境が著しく変化する現在、大学病院は地域医療機関といかに連携を進めていくべきなのか？この課題を院内外の皆様と共に考える場にできればと、講師には大学病院の地域連携部門として先鞭をとっておられる、愛媛大学病院医療福祉支援センター櫃本真幸^{ひつもとしんいち}センター長をお招きいたしました。

山田佐登美副病院長、皆木省吾副病院長、岡田宏基総合患者支援センター副センター長が当院の活動報告をした後、櫃本先生に「住民(患者)主役の地域医療連携」をテーマにご講演いただきました。

櫃本先生は、今後の医療政策の方向性を見据えながら、患者や家族のニーズに corres 応するために、医療は連携なくしては成り立たないこと、医療を社会資源と捉えて医療機関間の競争ではなく、共存・協働の視点が重要であることを熱く語られました。また、連携における大学病院の課題は「紹介患者の優先」「確実な紹介元への情報提供」「積極的な逆紹介」等を通じた「互いのパートナーシップ関係の構築」であること、さらに院内の目的・方向の共有化が難しいという縦割り組織の課題の克服と院内コンセンサスの形成が求められているというご指摘に、今一度院内での議論を高めていく必要性を感じました。

最後になりましたが講演会には、休日にもかかわらず院内外から約50名の方々が足を運んで下さり、貴重なご意見をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

幸せとは人との出会い



病院ボランティア研修会報告

6月15日(木)、今年度第1回目の病院ボランティア研修会を当院内にて開催しました。講師に、関西福祉大学社会福祉学科助教授 平松正臣先生をお迎えし、『ボランティアの価値と倫理』についてご講演いただき、ボランティア20名が熱心に耳を傾けました。

平松先生は、ボランティアとは、人を幸せにして、自分も幸せになろうとすること。相手の立場を理解することができるのは人間の特性であるから、相手の立場に立って考え、心が動いたら、それを素直に態度と行動に現わすことがボランティア活動といえると話されました。どうしたら相手の気持ちに寄り添うことができるのかを考えることで、ボランティア自身も変わることでできる活動が継続できればと思います。



自他の価値観についてのグループワーク



平松正臣先生

また、今回の研修会は、西日本放送の夕方のニュースにも取り上げられ、病院ボランティアの活動がさらに広がることを予感させられる機会ともなりました。

ミュージックセラピー「音で あ・そ・ぼ・う！」

音楽療法研究グループ 秀岡素子 音森美幸 中島徹也

2005年4月より、小児科病棟プレイルームにて入院中のお子様と、その御家族の皆様を対象に1～2ヶ月に一度、「音で遊ぼう！」をテーマに音楽療法をさせていただいております。

プログラム内容は季節により異なりますが、

- ・ 「こんにちは」の歌
- ・ 手遊び歌（カスタネット、鈴、タンブリンなどの簡易楽器を使用しながら）
- ・ 絵本・ペープサート・絵を使って音楽鑑賞
- ・ ミュージックベルを使用しながらアンサンブル
- ・ 「今日の日はさようなら」の歌

…で終了するようにしております。

季節を感じながら、ご家族で、リラックスしていただける時間を大切にしております。昨年のクリスマスには、総合患者支援センターの岡田宏基先生にも演奏に参加していただき、クリスマスコンサートも行いました。



10年以上前の話になりますが、息子が病気で当病院に入院して手術を受けた3週間の間に親子共、精神的にも不安定になり、気分転換できることを考えるのに苦労いたしました。当時、病院の先生や看護師の方々にも大変お世話になりましたので、少しでもご恩返しをしたいと思ったのがきっかけです。

気分の優れないお子様が、音楽にふれることによって、ふとした拍子にみせてくださる笑顔や終了後にご家族の方々が「楽しかったね。」「よかったわ。」とおっしゃってくださることに有難いパワーを頂いて、やりがいを感じ、嬉しく思っております。

アメリカで音楽療法の研究が盛んになる口火を切った、エドウィン・アトリー（Edwin Atlee）は「1804年 病気の治療における音楽の影響についての卒業論文」で「心と体の病気に音楽が有効に機能した」と述べています。音楽を楽しむことによって、少しでも不安や心配を和らげることができればという願いを込めて進めております。途中入退室もご自由ですからどうぞ、お気軽にいらしてください。

こころのケア

（第6回）

＜病気と認められない病気＞

副センター長 岡田 宏基

皆様の中には、何となく体調がすぐれなくて医療機関で検査を受けたけど、「異常ありません」、と言われて、安心はしたが、何となく納得できない気持ちになった経験のある方はいらっしゃるでしょうか？ この理由として、現代の西洋医学では、血液検査や、CTなどの画像検査で異常なものが見つければ、病気として認識することができますが、それらで異常が見つけれられないような、臓器の「働き」の異常については、病気としての命名が難しいのです。わずかに、過換気症候群や、過敏性大腸症などは病名がついていますが、私たちが不調と感じる状態の中では、ほんの一部分に過ぎません。ところが、このような状態は、心の状態を反映していることが少なくなく、不安に思ったり、気が滅入ったりすると、自律神経を通じて、色々な臓器の働きに影響が出てきます。ですので、検査で異常なしと言われたら、安心すると同時に、何か心の中で負担に感じていることがないかどうか、再点検してみることをお勧めします。

新しい入院歯科治療システムのご案内

身体の調子や病気のために、十分な歯科医療を受けられなかった方に、入院して全身の状態を良好に管理しながら、安心して歯科治療を受けられる環境を整えました。

対象となる疾患

- 身体障害者の方（車椅子利用等で通院困難な患者様 等）
 - 知的障害者の方（多数のむし歯があり、入院が可能な場合）
 - 要介護の方（脳梗塞後遺症、パーキンソン病 等）
- 詳細はご相談下さい。

治療

全身管理、鎮静、全身麻酔下での歯科治療

特殊歯科、歯科麻酔科を中心として、医学部・歯学部附属病院の全診療科の協力体制による高度で総合的な歯科治療を行います。入院治療は、お身体の状態を管理しながら行いますので、安心して受けることができます。入院は、1週間以内を原則とします。

入院歯科治療後のケア

入院歯科治療後には、かかりつけ歯科医の先生、かかりつけ医の先生との連携をとって、健康な口腔状態が維持されるように御指導いたします。

入院歯科治療のお問い合わせ

岡山大学医学部・歯学部附属病院 医事課 地域医療連携室 担当：亀森 まで
 TEL:086-235-7205 FAX:086-235-6761
 担当科：岡山大学医学部・歯学部附属病院
 特殊歯科総合治療部 歯科医師：江草正彦



認定看護師 紹介

WOC（創傷・オストミー・失禁看護）認定看護師 青井 美由紀

※ 昨年の11月に出産し、この7月に復帰しました。

現在、外科外来業務と月曜日、木曜日のストーマ外来を行っています。ストーマ造設患者さんは、疾患の苦痛のその上に排泄機能が変わるといふ重大な問題により大きな不安を抱えます。また、生涯その生活をしないといけない方が多く、その不安を少しでも軽減でき、笑顔で生活できるように援助するのが私の仕事と思っています。より早く問題解決できるように栄養士さんや、総合患者支援センターの医療ソーシャルワーカーさん、訪問看護ステーションの看護師さん達と協力し、力を合わせています。ストーマ、褥瘡、失禁看護についてご質問等がございましたらお気軽にご連絡ください。



※オストミー、ストーマとは人工肛門・人工膀胱のことを指します。

国立大学医療連携・退院支援部門連絡協議会 に出席しました



このような長ったらしい名前の会議が、暑いさなか、7月初めに名古屋大学病院で開催されました。これは、文字通り、(旧)国立大学病院と、地域の医療機関がどのように連携を図ってゆくことが望ましいのかを討論する会議で、今年で4回目になります。近年、患者様からの様々な相談を受けたり、医療機関の連携を担当したりする窓口が各大学病院で設置されるようになったため、このような全国会議が持たれるようになりました。今年は各大学病院が地域医療連携の取り組みをポスターで発表して相互理解を深め、更に岡大病院からは、初診患者様の紹介予約制度とその利点について報告することができ、他の大学から参考になったとの評価を得ました。